
魔法使いを拾いました

東和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いを拾いました

【Zコード】

Z0245Z

【作者名】

東和

【あらすじ】

七月七日 それは私が鷹夫さんと結婚した日。結婚して今日で三年目、私たちは離婚した。そしてその夜、私はごみ捨て場で男の子をみつける。自分を「魔法使い」と名乗った男の子は、なぜか私の部屋に住み着いた。（浮気、離婚の話があるのでR15タグを付けてます）

すみずみまで書きもらしがないか確認した。**鷹夫**さんにも確認してもらい、私は印鑑にベットリと朱肉をつけて、自分の名前の横に捺した。

鷹夫さんは、私の顔を見ずにそれをそそぐと茶封筒にしまった。
「ほかに書くものある?」

「ない」

どこか申し訳ない返事。

「なら行くわね。ほかに私がすることはあるの? あるなら手短にしてくれないかな。用事があるの」

「いやいい。大丈夫だ、なにもない」

すりきれた赤いボストンバックを肩にかついで、三年間お世話になつた家に背を向けた。

「縁、すまない」

ドアを閉める前に、かすれた声で鷹夫さんの声がした。私はふり返らない。

「そんな言葉を吐くくらいなら、プロポーズしてほしくなかつたわよ」

七月七日。

結婚式をあげた日と同じ今日、私たちは離婚した。

2：赤い石のピアス

彼が浮氣をしている。それを知ったのは、結婚一年目を過ぎてからだった。彼のスーツにブラシをかけていると、胸のあたりになにかがあつた。ひっくり返してふるうと、内ポケットから赤い石のピアスがポトッと床に落ちた。

私は、ピアスホールを開けていない。

なら、なんでこんなのがここに？

まさか……浮氣なんて。ありえないわ、だって彼は私を愛してるので言つてくれるもの。そんなの、いや、でも。きっと氣のせいよ。バカね、私 そう思いたかった。

でも、それはただの勘違いなんかじゃなくて、すべては現実だった。

もともと隠し事は長く隠せない鷹夫さんは、そのピアスについて問いただせば、こちらがびっくりするほどあっさり浮氣を認めた。相手は職場の事務課の人で、私より三つ年下の一十三歳。鷹夫さんが勤める会社は、男性ばかりの建築会社だ。少ない女性社員、その中でも相手の女性はかわいらしい容姿でずっと年下。

「気がつけば目で追っていたんだ」 そう告白した鷹夫さんの顔は、彼が私に告白したときのそれにどこか似ていた。

3：一ノ瀬鷹夫

「縁ちゃん、やつと名字が七緒さんに戻れたねえ」

私の勤め先は「エロー」という小さな雑貨屋さんで、オーナーは六十を過ぎた吉森老夫婦だ。旦那さんは弥一郎さん、奥さんはゴズエさんという。一人は私小町なところから知っているので、「縁ちゃん」と呼んでくれている。

鷹夫さん……一ノ瀬さんが浮氣をしていると知った一人は、私以上に怒ってくれた。わざわざ一ノ瀬さんを呼び出して怒鳴りつけたくらいだ。あのときばかりは、一ノ瀬さんへの怒りがすっとんでもつた。

「あのウジ虫は一十九歳だったよねえ」

「浮氣の相手さんは二十三歳だから、まあなんといつか、若い口ならいいのかしい。イヤだわ、ほんとおに」

「あのウジ虫のせいで、縁ちゃんにバッテンが一つついてしまったねえ」

「社会的に抹殺されてしまえばいいのよ」

「そうだねえ」

「いやでも、お一人のおかげで慰謝料とかはたくさんふんだくれましたから」

「当たり前さー。あのウジ虫からしぼれるだけしぼらないとアタシら、アタシら、うう」

「お母さん、泣くんじゃなによ。縁ちゃん困つくなやうだろう」

「わかつてゐよ。でも、アタシやあ縁ちゃんの『両親になんていえばいいんや』」

早くに私の両親は他界している。一人はそのことを知つてから、私は自分の子どものように可愛がつてくれている。一ノ瀬さんとの離婚も、一人がいないとまともにできなかつた。

「お一人のその気持ちだけいただきますから」

「 そ う な の か い 。 イ ャ だ よ 、 遠 慮 は し な い ど ぐ れ ね 」 一 人 は 、 し
わくちやな顔で二コリと笑つた。

「 もちろん で す 」

私 は 、 い つ も と 同じ よ う に 笑 つ て 返 事 が で き た だ ろ う か 。

4：処分方法

「そろそろ私はお邪魔しますね
もう帰っちゃうの」

「ゴズエさんは、まだ話しきりないらしい。

「一人と話してたら、時間がたつのが早くてびっくりですよ。ほら、もう三時すぎ」

「あらあら、ほんとだねえ」

「それに、ちょっと今日は質屋に行きたくて」

足元の赤いボストンバックを指差した。これは、私の誕生日に弥一郎さんがくれたものだ。愛用して長くなるけど、まだまだ現役で活躍してくれる。

「一ノ瀬さんに私があげたものとかを売りにいくんです。慰謝料もしっかりもらってるけど、なんだか一ノ瀬さんのものにしておくのがもったいなくて」

私が一ノ瀬さんからもらつたものは全部置いてきた。慰謝料金額が決定したとき、一ノ瀬さんは顔が真っ青になつていた。彼だけじゃなく、浮氣相手の人もそれは同じ。実際の金額より安く慰謝料を見積もつていたんだろうからね。

まあ、ご愁傷様よ。

そのときに、「私が一ノ瀬さんにあげたものはもつていきます。私がもらったものは置いていくから、別に問題はないでしょ?」

彼は、ただ首を縦にふるだけで返事をした。

「ブランド物もあるから、けつこうな額になるはずなんで。それでプチ旅行を計画したいんですよ」

「いいねえ旅行。僕もよくお母さんと旅行をしたよ」

「お父さんはいつも迷子! しまいには迷子札を持たせてね」

「違うよ、お母さんが迷子になつてたんだよ」

「迷子になる人はね、みなそういう言うのさ!」

照れた顔で弥一郎さんが「それはむづ聞あきたよ」とわっぽを向いてしまった。

「うりやましいなあ。

私も、いつかこんなふうに鷹夫さんと年をとつて……。

「縁ちゃん？ どうかしたの？」

「や、なんでもないですよ！」

「そおかい？ 気をつけて帰るのよ

「相談にはいつでものるからねえ」

「じゃあ、また来週に」

一週の休みの間に、一ノ瀬さんをちゃんと離してましたといえるようになろう。

いえるようにならなきやいけないんだから。

浮気がわかつてからのゴタゴタと、浮気相手とのゴタゴタを心配する必要はもうない。肩にのつていた漬物石みたいな重さはどこかにとんでいった。

今日で、私たちは赤の他人になつた。なつたんじやなくて、戻つたというのかもしれない。彼と、「一ノ瀬鷹夫」という男性と出会う前に戻つただけ。

「実は、まだ、彼との愛を捨てれない、でしょ？」

いやらしく私の心が笑う。

うるさいなあ。ちょっと黙つててよ。

そいつは細く笑い声をあげながら、胸の奥底にひつこんだ。

5：ごみ捨て場

時刻表は九時すぎ。こんな時間になつてから、お風呂場の電灯がきれていたのをおもいだした。近くの家電屋さんがたしかまだ開いていたはずだつたから、財布をひつつかんで急いだ。

無事に電灯は買えた。

買えたはいいんだけど、これはないよ。

「ウソでしょーもう！ 雨がふるなんて聞いていわよ！」
着ていた薄手のシャツを頭からかぶつて、土砂降りのなか走りぬける。雨で服がべつたり肌にはりついて気持ち悪くてたまらない。夏なのが救いかも。もつと気温が低いときになんか状況になつたら……うん、間違いなく風邪だわ。

道は真っ暗で走りにくい。街灯はあるけど数は少なく、それにくわえてブツンブツンと点滅しているから頼りにならない。唯一ちゃんとついてるのは、もう少し先にあるごみ捨て場のだけだ。

「いやー！ もう雨きらいー！」

やつとごみ捨て場の街灯が見えた。そこを曲がつてちゅうと走れば、もう我が家だ。

さあ、ラストスパートをかけるのよ縁！

地面をけるたびにどびちる水溜まりを気にする余裕はない。もうびしょ濡れだから、いまさらどう濡れようが関係ないし、なにより早く帰りたい一心でスピードをあげた。

「あと、少し　みいいつ！」

足元をみてなかつたのが悪かつた。ごみ捨て場をすぎよつとしたちょうどそこで、なにかに足をとられて豪快にこけた。

痛い、地味に痛い！

電灯が割れるのを死守するために、両手が使えなかつたのが悪かつた。顔面からこけるのはまぬがれたけど、あと二の腕、そしてひざがジクジクと痛い。

「あうつ。こつ。たいなによお」

こんなに盛大にこけるとか、いつぶりだっけ。
私をこんなにしやがった原因はなによ！

「あ、うえ？」

薄汚れた灰色のかたまりが落ちていた。

「なにこれ、え、え」

雨でぐっしょりに濡れていって、泥だらけのその物体。
ごみ捨て場から半分はみでた形で、それはあった。

6：きたない男の子

大きさは中型犬より少し小さいくらい。そんな大きさ。半分以上が道にはみだしている。

なぜだかそのかたまりが気になつた。

私は、おそるおそるそれに手を伸ばした。

薄汚れた布はずつしり重い。けつこうな厚さで、たぶんカーテンとかかな。

それははしをつかんでゅっくりひいた。

「雨のせいで重いわね。よつ、と！」

ぐるり。

中身がむこう側にころがつた。

はじめに見えたのは、砂利がからまつた赤茶げた糸みたいなのが

ぐるり。

つぎに見えたのは、その糸がだんだん増えて束になつていてるもの。

ぐるり、ぐるり。

最後は一思いにひつぱつた。

「ひ、ひいいつ」

おとこ、のー」。

赤茶色の髪の男の子が、くるまつていた。

「に、人形よね。まさか、ほんとは、人間でした、なんてオチじやないわよ、ね」

真つ白をとおりすぎて青くなっている頬をつついてみた。
やわらかい。

「人間！？ 男の子！？」

いそいで生きているか確認した。

呼吸はちゃんとしていた。けど冷たすぎる。体冷たくて温もりが
まったくない。

「ぼく！ しつかりしなさい！ おきて！ 寝てないでおきなさい

！」

顔にはりついた髪と砂利をぬぐつてやる。頭をもちあげて抱えあげると、体がすく軽い。すりきれた長袖のシャツからのぞく手首は細くて弱々し。よくみれば裸足だ。

「うう」

か細い声がきこえた。

なんとか目をあけてもらわないと！

「ぼく、ぼく。しつかりして。だいじょうぶだから。ほら、おきなさい」

「うあ、あ、」

大きく背中をのけぞらせた男の子。苦しげな表情が、私を嫌な気持ちにさせる。

ふるふるとまつ毛はふるえた。ゆっくりまぶたが開く。鋭くとがった目をしていた。髪と同じ色の瞳はそこいらをさまよつて、それから私を見た。

「だ、だいじょうぶ？」

男の子は、口をパクパクと何度も動かすだけで返事をした。

「病院。そうだ、病院につれていかなきゃ」

電灯はそこらへんにほうり投げたままだけど、また後でとりにくればいい。

電灯よりは命を大切にしないと。いまこの子を助けられるのは、私だけだ。

「いまつれてくから」

男の子は力弱く首を横にふった。

「バカいわなの！ 死んじゃうわよ！」

私たち大人はまだいい。少々ぬれても風邪はひかない。ひいてもそんなにひどいものじゃない。

けど子どもはちがう。

ちょっとした気温の変化で風邪をひくし、へたにこじらせたりなんしたら、あっさり死んでしまったりする。

「ま……まで」

男の子がいつた。

「まで……た、のむ、から」

のじが悪くなつてゐみたいで、声がかすれてゐる。それでも少しづつは頬がはつきりしてきた。

「しゃべらないで、さあいくよ」

「だ、から……までと、いつて、いる…」

こんどはしっかりと声がでた。かわりに「[ジ]イ[ゼ]イ」と脣でこわをしだしたけれど。

「おんな、びょういん、は、だめだ」

男の子は、

「つれていつたら、わしはないでやる……」

私の首すじに顔をうめて、それつきりしゃべらなくなつた。

7：ワガママ

ひたすら首をふってイヤイヤをくちかえす男の子。こわいひばなれてくれない。

しうがない、つれて帰るしかないか。それから病院につれていけばいい。

片手で男の子を抱え、もう一方でセーリング傘に濡れている電灯を捨つ。

「びょういんは、だめだ！ いかないぞ！」

「わかつたから、わかつたから落ちついて。しうがないから私の家につれていくわ」

「ほんとだな！？」

「体あたためて、着替えて、それから病院よ」

「いやだ！ わしひびょういんにはいかないぞ！」

「はいはい、とにかくおとなしくしてなさいよ」

なんだか心配するのもバカラしくなつてきたわ。

頭から足までびっしょりな私たち。下着なんてぐしゃぐしゃになつてしまつてゐる。くわえて、この男の子だ。ひとつじてはなれないから不愉快感はどんどん上昇中だ。

「くそ、あたまがぐらぐら、するわ」

「おとなしくしとよ。すぐに家だから」

「さ、れむい」

「びびーつ。

このガキ、人の服で鼻水ふいたな？

「クソガキめ」

「うるせー。はやくあるけ。わしは、さ、れむいのだ！ れやんつ

！」

ピィピィわめくから、おもわす手がでちゃつたじゃない。

「しりをたたくなー。わしは、びょうにんだぞ！」

「病人なんて難しい言葉、よく知つてゐるわね
「おまえよりはあたまはいいんだ！」ぎゅむつ！」

まだわめくか。

頭をぐいと肩におしつけた。

しばらぐはむじむじと文句をたれていたけれど、だんだんおとなしくなつてくる。

「なら病人らしく、おとなしく、しづかに、抱かれてなさい」

男の子はそれっきりしゃべらなくなつた。

家に帰つてすぐに、男の子をバスタオルでくるんでふいてやつた。髪の毛があまりにもひどい。

長さは不ぞろいで、一番長いのは床をひきずつていいる。でも、全体の印象はショートカットが少しのびた感じ。前髪の一房が、てれんと肩すぎまでたれている。無理矢理エクステで長髪にしたみたい。虐待とかかな。病院はいやだつていうし、ばれたくないとか。押し入れにあつた電気ヒーターをだしてやる。スイッチを回し、男の子の前においた。

「そこの前でまつてなさい」

「ひとりにするのか？」

さびしげな声に、つい「ならついてきなよ」といつてしまいそうになる。それをぐつと我慢し、

「着替え用意してくるだけよ。それとお風呂の用意。すぐに戻るから」

「しようがないからまつてやる」

男の子は、どこまでも上から田線だった。

せりなくしてお風呂がわいた。男の子の身ぐるみをひっぺがしてお風呂場に投げてやつた。「このおこおんなーつ」って叫び声がしたけど、私はしーらないつと。

あの様子ならひとりでお風呂は大丈夫かな。いちおう脱衣場には私が控えているし。

男の子がお風呂にはいっているあいだに、私は自分の着替えをちやつちやかします。

洗濯機に私とあの子の服をぶらりんでスイッチをいれた。洗剤はすこし多めのは、なんとなくだ。

「いつまでそこそこいるんだ」

「だつてぼくがおぼれたら大変でしょ」

風船をわつたような大声で、

「ひとりでふろくじいはいれるわ！」

といわれてしまつた。心配は心配だけど、しうがない。これ以上さわがれるのは勘弁だわ。

男の子がお風呂にはいつてるあいだに、ホットミルクをつくつてあげようか。

「あ、牛乳ない」

冷蔵庫には豆乳と飲む乳酸菌しかなかつた。

「豆乳？ や、意外とホット乳酸菌も」

いやまてよ、あつたかい乳酸菌ははたしてだいじょうぶなのかな。乳酸菌は「菌」つていうくらいだから、生き物だよね。それを加熱したら……。

「想像するのはやめておいつ」

ペたペたと足音がした。だんだん近づいてくる。

「おい、あがつたぞ」

「あがつたんだね。て、髪の毛ちゃんどふきなセコよ。ただでさえ

髪の毛ひきずつてゐるのに。自分の歩いたあとは見た？ ナメクジがとおりたみたいになつてゐるわよ」

「ふん。ほつとけばかわくだろ。問題ない」

「だれがそのぬれた廊下をふくのかな？ ん？」

「ふいてくれるのか。よろしくたのむ」

「それが人に頼む態度か！」

さつきの弱々しい姿はなくなつた男の子。言葉をはつきりとしゃべれるくらいには回復したみたいで、一安心だ。

でもこの態度はひとすぎる。いただけない。将来がどうなるやら。「そんなことよりも！ 豆乳はともかくあつたかい乳酸菌は悪魔の飲み物だ！ なぞの酸味にえもいわれぬあの後味！ うう、わしは二度と飲みたくないぞ！」

どうやら一度あつたかい乳酸菌は飲んだことがあるみたいだ。悪魔の飲み物つて比喩するんだからそういう味だとみえる。ふむ、

「なら乳酸菌こじょうね」

「女！ だからイヤだといつてるだらう！」

男の子に素早く飲む乳酸菌がはいつた紙パックを奪われてしまつた。こぼされでは大変だから、すぐさま奪いかえす。

「ただの冗談よ」

男の子は眉間にぐつとしわをよせる。

「ウソだ！」

「ほんとに冗談よ。第一、そんなおいしげかまざいかわからぬもの、確認せずに飲ませるわけないじゃない」

「目が本気だつた！ わしは見たぞ！ 絶対に本気だつた！」

だぶだぶのロングTシャツを握つてギヤンギヤンとほえまくる男の子。

顔つきがかわいらしいから、ほほえましい。

あれ、まつて私。

このさわがしさになれてきてない？

「さて、ぼく。ならココアなんていかが？」

「……しかたがない、そこまでいうなら飲んでやる
弱つたり、わめいだり、怒つたり、静かになつたり。

「子どもって見ててあきないわね」

男の子が「子どもじやない、もう立派に成人しとるわ！」とキャ
ンとほえた。

9：ペシペシペシ

紅茶と「ココア」を両手に、男の子がまつりビングにむかう。紅茶が私のだ。基本的に、私は一年中熱いものしか飲まない。冷たいのを飲むのは、外食くらいなのよね。

時間はもうすぐ十一時になる。雨は帰ってきたときほどひどくない。

男の子は、私のお気に入りのクッショーンを抱えて私をまつっていた。赤い折りたたみのテーブルをだしてやり、男の子側に「ココア」をおく。男の子はそれにどびついた。

熱いのが苦手なのかな。

はふはふしながら「ココア」を一生懸命に飲もうとしてる。しゃべらなきや可愛いわあ。いやされるわあ。

口まわりについた「ココア」をティッシュでふいてやる。男の子は文句をいわずに素直にふかれる。

可愛いよ、小動物みたいで可愛いよ。

「いつまでそんな目でわしを見る。幼児趣味か」

「よし、撤回だ。可愛いわ」

顔だけか、この可愛さは！

「それよりもだ」

「なあに？」

「「ココア」だけじゃたりなくて、だな」

ぱつくりと「マシコマロ」ほつぺたをふくらました男の子は、ペシペシペシとテーブルをたたきだした。

「腹がへつた。女、砂糖はないか。わしは砂糖が食べたい」

「は？」

「腹がへつたまらん。それにいまはとにかく甘いものがほしい..」

ほんとにお腹が空いてたまらないのかもしれない。
..」「..

砂糖くらこくべりでもあるナビ、「砂糖がほし」って切羽つま
りすぎでしょ。」

「私、ここのナビに「砂糖しかくれなね」っておもわれてるのかし
ら。」

「たしかゼリーとクッキーがあるはずだけど、食べる?」

「食べる! あとココアがまだほしい!」

「どんだけ腹ペコよ」

「しょうがないだろ。ここ一ヶ所くらいはまともに食にあつつかって
おらんのだ」

それは親に「飯をたべさせてもうつらない」と解釈してもいいん
だろうかな。
それがほんとなら、こち早く保護してもらひついたほうがいいんだけ
ど。

明日男の子にばれないよう市警に連絡するしかないかな。

私は男の子にクッキーとゼリーをしてやりながら、計画をたて
る。

「ふおおお、久しづりの」飯!」

うれしそうにかじりついた。

むぎゅつ。

はむひ。

かりかりかりかり、こくべりくん。

「あつちい!」

そりやいれたてのココアは熱くて当たり前だと思うよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0245z/>

魔法使いを拾いました

2011年12月7日22時48分発行